

サステナブルな文化資源 としての記憶？

トルコにおける地震の記憶から

Memory as a Sustainable Resource? :
Disaster Memory of Kocaeli Earthquake, Turkey

木村周平

KIMURA Shuhei

- ①はじめに
- ②記念碑——忘れない？
- ③地震文化博物館——理解させ、想起させる
- ④記念式典
- ⑤資源の零度？
- ⑥おわりに

【論文要旨】

自然災害はあらゆる社会にとって対処を迫られる重要な問題である。防災においては近年、国家・行政によるいわゆる「公助」には限界があり、住民のレベルでの防災・減災が必要であることが主張されている。過去の災害の経験をモノ化し、社会の内部に適切に配置し、過去の記憶を共有し、次の災害に備えるために人々が「利用」できるようにすることは、景観を「資源」として活用する、ひとつのあり方だと考えることができる。

以上を背景に、本論文は、1999年にトルコ共和国北西部を襲った大地震をめぐる記憶について、「文化資源」というメタファーを援用しながら、「文化資源」としての災害の記憶がどのように「利用」されているかに注目し、その「持続可能性」について考察する。具体的に検討するのは、記念碑、地震博物館、そして記念式典である。事例検討をつうじ、あるものを「資源」として利用するためには、それを「資源化」する主体と、「利用」する主体の二つ、および「資源」の目的（何のための資源か）の明確化が必要になるということが指摘される。さらに災害の記憶に関しては、「利用する主体」と、「資源」の「利用」によって生み出されるものが一致する、ということが主張される。つまりそこでは、「資源」は「資源」であると同時に、ひとつのサイクルを開始させる契機としても存在するのである。そして最後に、「資源」としての災害の記憶の「持続的利用」における問題として、「利用する主体」の曖昧さという問題点を指摘する。

【キーワード】文化資源、持続的利用、災害の記憶、トルコ、コジャエリ地震

①……………はじめに

本論文は、文化資源としての災害の記憶について、筆者が研究を続けているトルコの事例から論じる。「文化資源」という語の導入によって焦点とするのは、利用（活用）の問題である。

一般に資源は、「何かのために役立つ何か」と定義することができる。同時に、もともとの語である resource から考えれば、その「何か」が人の役に立つものになるためには、「本源」から何らかの手を加えられている必要がある（re-source）ということも指摘できる〔今村 2007〕。たしかに、資源としてすぐに思い浮かぶ天然資源は、発掘され、加工されることで工業生産の原料となったり、あるいは物理的なエネルギーに変換されて動力となったりすることで、何かを生み出すことを支えるものである。だとすれば、資源は、それに手を加えて「資源化」し、また「利用」する主体の存在とは切り離すことができない、といえる。つまり資源は、自律的な存在として捉えるべきものではなく、ひとつのプロセスとして、つまりそれ（＝資源となるもの）を使って「誰か」が「何か」を生み出す（あるいは、作り上げる）ものとして考える必要がある。

ところで、本特集のタイトルにある「文化資源」は近年、人文・社会科学の領域でひろく議論されているテーマであるが、それも資源である以上は、いま述べたように、「誰か」によって「何か」を、直接的にあるいは間接的に生み出す「何か」である、と考えることができる。しかも「文化」資源であるからには、そうした創造あるいは生産行為が、「文化」のために役立っている、あるいは「文化」を用いてなされているものであるはずだろう。とはいえ、文化という、まったくもって定義しがたいもの「のために」あるいは「を用いて」と何かを生み出す、ということが、実効的な意味をもちうるかどうかは、きわめて怪しい。

もちろんここで「では、文化とは…」と考えを進めることもできる。しかし、この問いが果てしない泥沼に陥りかねないものであることは、文化人類学の歴史が身をもって示している〔cf. 福島 1998〕。そのため、ここでは「文化資源」を、あくまでもメタファーとして用いようと思う。つまり、ある事象について、「(文化)資源」的に見ることで、その「(文化)資源」の「開発」や「希少性」、「搾取」、「枯渇」などの問題——おそらくこうした問題は「資源」という視角を用いなければ問われることはないだろう——について考えてみる、ということである。⁽¹⁾

以下でこの枠組みを通じて議論するのは、「資源」という言葉はほとんど用いられずに、しかし上で見た「資源」と同様の図式——誰かが、何を使って、何かを生み出す——を用いている事象である。こうした図式の相同性をもったものに対し、「文化資源」という枠組みから、その「資源」としての利用や枯渇などについて考えてみることは、有意義な結果を生み出す可能性がある。それが、防災の領域における、記憶の活用である。

近年、防災実務の領域においては、災害の経験あるいは記憶を共有・活用することに、大きな注目が集まっている。これは「記憶の語り継ぎ」というような具体的な形で議論されることが多いが、ここには2つの点で1995年の阪神・淡路大震災のつよい影響がある。ひとつめは、この地震において、国や行政による災害対応のみによる対応の困難さと、近隣住民あるいはボランティアの果たす役割の重要性が明らかになったことである。これを受けて、防災行政では自主防災組織の形成の促進な

ど、住民（コミュニティ）による災害対応（共助）の推進が図られるようになっている。もうひとつは、この地震を契機に、記憶をめぐって様々な動きが現われたことである。たとえば「阪神淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献する」ことを謳う「人と防災未来センター」の設立、「語り部」の活動、あるいはよりローカルなレベルでの慰霊碑の設置や被災体験の記録など、それまでの災害とはけた違いに、記憶を維持・保存する必要性が主張され、また実践されているのである。

こうした、住民による積極的な活動やローカルな知識（あるいは経験・記憶など）に目を向ける傾向は、世界的にも広まりつつある。そこではローカルな知識や技術は「災害文化（disaster culture）」などと呼ばれ、研究や開発プロジェクトにおけるキーワードとなっており、1990年代の国連「国際防災の10年」をついで、2005年に開催された兵庫会議で採択された兵庫行動枠組でも、「安全性と回復力の文化（a culture of safety and resilience）」の醸成は主要なテーマの一つとされている。

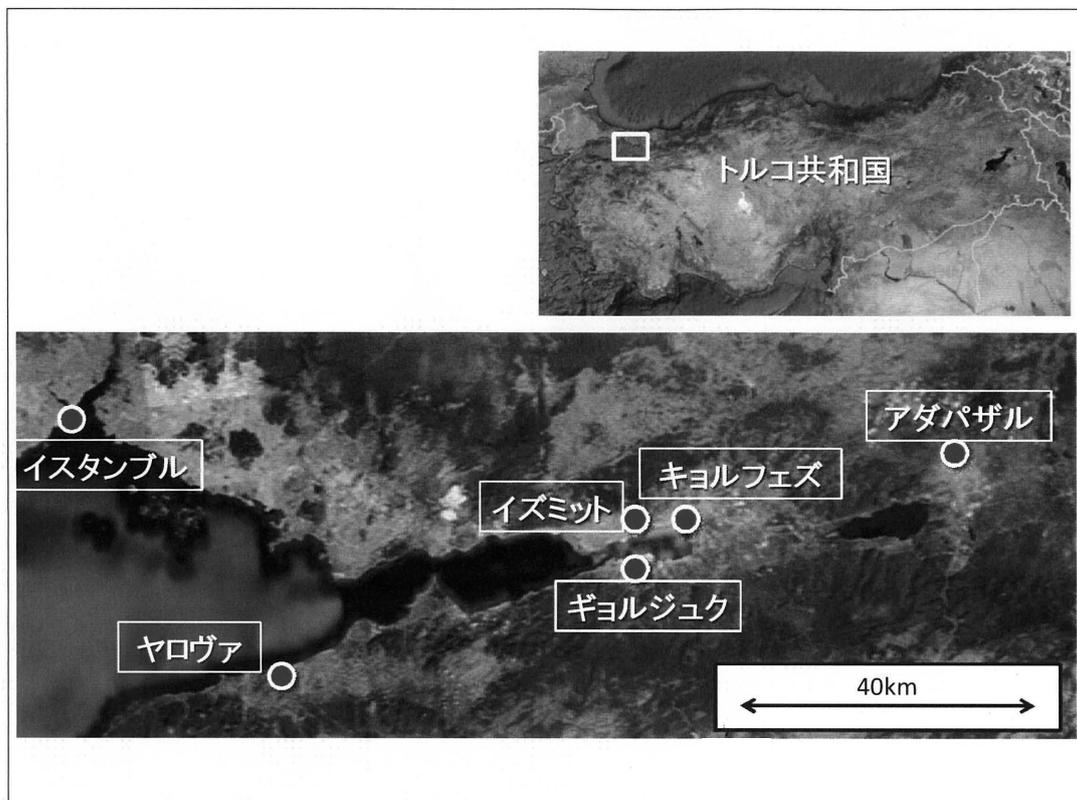
以上のような流れにおいて、「住民（コミュニティ）が、経験・記憶を用いて、災害文化を醸成する」という図式が想定されていること、そしてこれが上で見た資源をめぐるとパラレルであることは明白であろう。本論文が災害の記憶を「文化資源」として捉えようとするのはこのためである。

ではこの「資源」としての記憶について、何を問題にするのか。本特集のタイトルも含め、「文化資源」については、これまで多くの研究が、「資源化」というプロセスに注目してきた[e.g. 内堀(編)2007]。つまり、あるものが資源として「発見」あるいは「開発」され、資源となるプロセスを、具体的な事例から追ひ、そのプロセスを批判的に検討する、ということである。しかし、そのアプローチだけでは、その「資源」が、実際に役立っているかどうかは明らかにならないし、佐藤[2007: 48]の指摘する、資本と資源の「時間意識の幅や厚みの違い」（後者の方がより長期的な時間意識をもつ）も曖昧になってしまう危険性がある。

それゆえ本論文では、災害の記憶が「資源」として「利用」されている場面に注目し、その「持続的利用」の問題について考える。この検討の事例として扱うのは、筆者が研究を続けている1999年トルコ・コジャエリ地震（マルマラ地震、イズミット地震などとも呼ばれる。県ごとの死者数に関しては表1、および本論文に登場する地域に関しては地図1を参照）である。次章以下では、記憶が手を加えられて「資源」化し、利用に供されている場面に焦点を当てながら、議論を進める。

表1 コジャエリ地震 県別の被害（出典：[KYM 2000]）

県名（本論文中に登場する都市）	死者数
コジャエリ（イズミット、ギョルジュク、キョルフエズ）	9,477
サカリヤ（アダパザル）	3,891
ヤロヴァ	2,504
その他	1,608
合計	17,480



地図1 トルコ・マルマラ地域地図(筆者作成, Google Earth を利用)

②……………記念碑——忘れない?

事例部分は、トルコ共和国の北西部に位置する、コジャエリ県ギョルジュク市に建てられている記念碑から出発する。というのもここには、上で見たような「資源」に関わる問いが、まさにモノ化しているからである。

ギョルジュク市はマルマラ海東部に細長く伸びる湾(キョルフエズ)に面し、海軍の町として知られる、人口が10万ほどの小都市である。この町で、海岸は市民にとっての憩いの場である。そこには、昼夜問わず連れ立って散歩する家族連れや、海岸に沿った遊歩道に附設されている公園で子供を遊ばせる女性たちや、海風に吹かれながらカフェテリア風のチャイハネでおしゃべりの花を咲かせる老人たちの姿が見られる。夏にはアイスクリームの屋台も出る、のどかな空間である。

記念碑はこの海岸の外れに建てられている。黒色、高さ6mほどの細長い塔である(写真1)。陸側を向いた側面には時計が嵌め込まれ、文字が書かれている。時計はよく見ると絵であり、その時刻は3時をやや過ぎた時間を示し続けている。その下には、トルコ語で以下のように書かれている。「1999年8月17日/地震の犠牲者/その記憶のために作られた/2007/忘れない⁽³⁾」。その下にはギョルジュク市の市章が描かれている。

この文章から分かるように、これは1999年8月17日にこの地を襲った大地震の記念碑なのであ



写真1 記念碑

る。ギョルジュク市はこの地震の震源にもっとも近い町であり、海岸沿いの地盤が陥没して商店街が海に沈んだり、住宅群が倒壊したりして、多くの死者を出した。この記念碑のそばを見回すと、地震で海に沈んだ町の街灯が何本か、波の間から突き出しているのを見ることができる。

社会的記憶についてはじめて論じた M・アルヴァクス [1989] が述べていたように、石は永続的で、記憶を保持するのにふさわしい。しかし、それが何かを永続的に生み出すかと言えば、決してそうではない。

この記念碑があのかジャエリ地震と呼ばれる地震についてのものであることは明白である。しかしこの記念碑が人々に伝えようとするメッセージについて考えるとき、それが予想外に曖昧なことに驚かされる。その地震が発生したのは 1999 年 8 月 17 日午前 3 時 2 分であり、それは碑文にある通りである。しかし、そこには地震そのものについての情報、例えばマグニチュードや震度などについては書かれていない。さらに重要なことに、どれだけ多くの死者が出たか、どれだけ多くの建物が倒壊したかという、あれほど話題になった被害については何も書かれていない。ただそこからは「犠牲者」⁽⁴⁾ということばで、死者があったことを知るのみである。

そして、ここでとくに注目したいのは、最後に唐突に現れる、「忘れない」という言葉である。この「忘れない」は、動詞の未来形が使われていることからわかるように⁽⁵⁾、明確な意思表示というニュアンスをもつと考えることができる。しかしそこでの主語が誰なのかは、トルコ語の言語的な性質上、一人称複数 (= 「われわれ」) であることは分かるが、それ以上の具体的なことについては、何もわからない。さらにこの「忘れない」においては、目的語も曖昧なままなのである。⁽⁶⁾

誰が、何を忘れないのか。もちろんこの省略は、記念碑を訪れる人にはそれがあまりにも当然なので言うまでもないからそうになっているのだ、と見なすこともできる。理屈から言えば、忘れるためにはまず記憶していなければならない。だとすれば、「われわれ」とは地震を知るもの、地震を経験したもののなのであり、そうした人々こそがこの記念碑を訪れるのである。

こうした循環論法には他をよせつけない強さがある。しかし、よそ者の人類学者にとって、またこの記念碑を、「誰か」が「何かのために」利用する「資源」として捉える本論文の視角においては、「忘れない」——記憶の反復的な想起、言い換えれば記憶という資源の「持続的活用」——を強く訴えながら、その中身を明示しないことは、大きな問いを投げかける。

いったい、「誰」が「何を」忘れないのか。この記念碑そのものについてはあとで再度検討することとして、次にこの問いについて、地震についての博物館の事例から考えてみよう。

③……………地震文化博物館——理解させ、想起させる

地震についての記憶を集積し、展示する「地震文化博物館」(Deprem Kültür Muzesi)は、サカリヤ県の中心都市であるアダバザル市において、地震からちょうど5周年となる2004年8月17日に開館した。博物館開設はもともと公共事業住宅省(災害復興などを担当する)の発案であった⁽⁷⁾が、その後アダバザル中央市役所が管理することになったという。なぜアダバザルに作られたのかは関係者に対する聞き取りにおいてもはっきりしなかったが、すぐ後で見るとこの町は繰り返した地震の被害を受けており、そのことが運営者側にとっては博物館設立の正当化になっていた。

博物館の場所は繁華街に近く、交通の便は良い。半地下になったその建物——実は、地震の破壊力を感じてもらうため、倒壊家屋に似せてデザインされたものである——はまるで、地下駐車場の入口のようでもあり、よそから訪れる者にはすぐに博物館であると気づくのは難しいかもしれないが、市民の認知度は高い(写真2)。この博物館は開館以来、無料で市民に開放されており、地震の記念日(夜間、この近くで記念式典が行われる)には、24時間開館する。こうしたことから、開館からの4年間でおよそ24万人の人々が訪れた、と博物館のスタッフは語った。⁽⁹⁾



写真2 地震文化博物館

「何かの役に立つもの」という「資源」の観点からすると、この博物館は、明示的なメッセージに満ちている。まず入口には「1999年8月17日のマルマラ地震で命を失った人々の思い出のために、この地震で体験されたものを理解させ、思い出させるという目的のために2001年（ママ）に建設された」と書かれている。ここでは「理解させる (anlatmak)」と「思い出させる (hatırlatmak)」という二つの言葉が使われているが、深読みすれば、この「資源」としての博物館の利用者には、記憶を「思い出させる」べき人＝すでに地震について知っている人あるいは記憶している人、および「理解させる」べき人＝地震を知らない人、という二通りの人びとが想定されているのである。

さて、「地震文化博物館」は、入口からぐるりと一周して入口に戻る、という一本の通路をもち、普通に歩けばものの数分でたどれてしまうほどの広さである。館内は外観と同様、柱が傾けてあったり壁に穴があいていたり、被災家屋を模した、デコボコとしたつくりをしている。展示物（すべて常設）は通路に沿って、このデコボコした壁面を利用しながら配置されている。

この不均質な空間構成とそれぞれの展示品が必要とする空間の大きさととの兼ね合い、および展示品の経年的な増加のために、展示品の配置には明確な秩序を見出すことが難しい。それゆえ、この博物館が何を置き、何を示そうとしているのかは幾分不明瞭にならざるを得ないのだが、インタビューにおける市の助役の「地震の瞬間のことを伝えることに主眼を置いている。それによって地震に対して準備し、今後の災害での被害を軽減することを目的としている」という言葉をもとに、強いて分類するならば、①発災時の記録・記憶、②防災教育、③慰霊、の3つに分けることができるだろう。

①の発災時の記録・記憶に関しては、数多くの写真や新聞記事の入った額、さらには地震の揺れの波線が描かれた地震計の記録紙もある。②の防災教育については、入館してすぐにある、キッチンに似せた部屋（テーブルや机、棚）をしつらえた振動台に代表される。これ以外にも救助活動の様子ジオラマ（オレンジ色のユニホームを着、マスクをしてヘルメットをつけた等身大のマネキン）や、構造物についての小さな実験器具、地震計の模型などもある。③の慰霊については、新聞記事などと同様に額に入れて飾られた、被災した子供たちによる絵画の他に、展示の一番奥まったところにある、ガラスのキャンドル群がある（写真3）。キャンドルはそれぞれ長さ10cm、直径4.5cmほどの円筒形をして、室内照明の光を反射してキラキラと輝いている。近づくと、それぞれに名前が書かれているのが分かる。これは1999年の地震によって市内で出た死者全員の名前を記したものであり、傍らの壁面にはパネルがあり、一覧の名簿になっており、キャンドルを探す手がかりとなっている。またここにはノートも置かれていて、来館者が自由に記入できるようになっている。

こう見ると、この博物館は1999年の地震の犠牲者を悼むことに加え、その地震を知らない人々にも、様々な側面から地震に関わるモノを示すことで、まさしく「理解させる」ものだと言えよう。⁽¹¹⁾市では毎年3月の第1週を地震週間とし、小学生にこの博物館を見学させるようにしており、2008年には3,670人の生徒がここを訪れたという。

では、この博物館を「資源」だと考えた時、それは誰にとっての「資源」であり、「何を」生み出そうというのだろうか？

これについては上で示した「1999年8月17日のマルマラ地震で命を失った人々の思い出のため



写真3 慰霊キャンドルの展示

に、この地震で体験されたものを理解させ、思い出させるという目的のために2001年（ママ）に建設された」という文章からもある程度うかがうことができる。しかし写真や記事を丹念に見ていると、そこには1999年の地震の記憶と防災ということにとどまらないメッセージが含まれていることも見えてくる。

展示品のなかでもとりわけ情報量の多い、新聞記事や写真を見てみよう。新聞記事は1999年の地震に関わるものだが、そのほとんどは被災直後のアダパザルの人々や政府の動きについてのものである。写真を見ると、1943年や1967年などアダパザルを襲った昔の地震の様子を写したのも、さらに平常時（被災前）のアダパザルの様子を写したのも、少なからず展示されている。さらに、ひとつの額には次のような文章が書かれている。「移住者とともに変化し昔と異なった景観のなかで、地震によってもっとも大きな変化を経験したアダパザルは、1902年、1923年、1943年、1957年、1967年及び1999年と、100年間に6回大きなサイズの揺れを経験した。大きな地震のたびに暗闇に包まれ、しかし最初の陽光とともに、傷ついたものを介抱し、かつての美しい日々を求めるアダパザルの住民〔は〕、同じ痛みを味わわないために、地震をいつでも忘れるべきではない（unutmamalı）、責任のある人々（sorumlular）に忘れさせてはいけない（unutturmamalı）」（〔〕内筆者補足）。

この文章では、記念碑で強調されていた「忘れない」という言葉と、アダパザルという地名とが、しっかりと結びついている。ここからは、この博物館の展示が、1999年の地震を契機としつつも、アダパザルという町に焦点が当てられていることが見て取れるだろう。⁽¹²⁾ さらにそれをもっと顕著に示すのは、あのキャンドルである。キャンドルは実は2007年になってようやく作られた、この博物館のなかでもっとも新しい展示物なのだが、そこに名前を記されているのはアダパザル市の死者だけなのである。いかなる理由でそうなっているにせよ、結果としてこのキャンドルは、地震によって亡くなった多くの死者たちのなかから、「アダパザル」という人びとの集まりを浮かび上が

らせているのである。

こうして、運営を継続するなかで、意識的にしろ無意識的にしろ、この博物館の焦点が1999年の地震の記録の収集・展示からアダパザルという町の地震の記憶の方にシフトしていることは、この「資源」としての博物館の利用者が明確化され、さらにその利用——アダパザルを今後襲うだろう災害の被害を軽減すること——も明確化されつつあることを示している。「地震週間」をつくり、小学生を招待して教育を行うことを行事化していることは、その目的のために「資源」としての博物館を持続的に利用する例として見ることができる。

とはいえ、その持続性が強固なものであるかということ、必ずしもそうではない。市の助役も、次のような不安を口にしていた。つまり、この博物館の運営において市民の関与がない、ということである。

先に引用した文で「責任のある人々」という曖昧な表現が使われているが、これは一般的には行政の担当者を意味することが多い言葉である。つまり、あの文章は市民と行政とを暗黙のうちに区別しているのだが、そのことにも現れているように、この博物館については、維持管理だけでなく、記憶の収集や収蔵の方向性なども、すべて市役所のスタッフによって決められている。スタッフはそれをまさに責任感と、任務に対する情熱から進めており、それ自体は批判されるべきではない。しかし残念なことに、スタッフには、市民がいかにかそれを活用しているかが、見えていないのである。もちろん、全く工夫がないわけではなく、上記のノートなどは、双方向的なやり取りを生み出そうという努力である。しかしそこに書かれたことの多くは、死者に向けられた言葉、あるいは自分に向けた言葉であって、博物館そのものについて具体的な要望などが示されているわけではない。そのためスタッフは、市民の意向に沿って博物館の展示を改善することができず、すでにある、別のよりよい——来館者に向けた様々な工夫がなされているはずの——施設に目を向けるのである。これは先の「外国の同様の施設を見習って」キャンドルを作った、という発言にも表れているし、スタッフが日本人である筆者に対して「人と防災未来センター」の展示を教えてくれるよう、並々ならない関心を示していたことにも表れている。しかし、当然のことながら、こうした「来館者」への間接的な対応は、「来館者」をきわめて抽象的な存在にしてしまう。

つまり、「資源」という言葉遣いからすれば、ここでは「資源化」する主体と、そのように加工して作りだされた「資源」を「利用」する主体とが乖離してしまっているのである。さらに言えば、博物館では、たんに両者が乖離している、相互に十分なコミュニケーションができていないというのではなく、「利用」する主体——防災するアダパザル市民——そのものが、実は資源化する主体によって想定され、また資源の「利用」をつうじて作りあげられようとしているものである、ということができるのである。

この点について、次に記念式典を見ることで、さらに考察してみよう。⁽¹³⁾

④……………記念式典

コジャエリ地震の記念式典は、地震が起きた翌年である2000年から毎年行われている。2008年現在まで継続していることを筆者が確認できたのは、コジャエリ県キョルフエズ市、イズミット市、

ギョルジュク市、およびサカリヤ県アダバザル市の4か所である。記念式典は出来事の記憶と関わるが、多くの場合、その式典と出来事との結びつきを、「日付」や「場所」によって示す⁽¹⁴⁾。その意味で、記念式典が一つにまとまらず、複数の場所で行われ続けていることは、1999年の地震がいかに広範囲にわたって深刻な影響を与えたかを示している。しかし、うがった言い方をすれば、地震の記憶を代弁する権利を、複数の、それぞれの「場所」と結びついたアクターがまだ争いつづけている、とも言えるだろう。

この4つの式典のうち、筆者が参加した経験があるのは、前3者である。いずれも基本的な構成は驚くほど似通っており、市長や招待者（商工会議所の会頭などのほか、地震学などの学者が招かれることも少なくない）による講演と、イマームの先導によるクルアーン朗誦をおもな内容とし、8月16日の夕方から深夜にかけて行われ、地震が起きた時刻である8月17日の午前3時2分まで続く（ただし、多くの場合は、日付が変わる前に行事がいったん終了し、残った式典の運営者や有志などで3時2分にあわせて、海岸から海に花輪を投げ入れるなどの行為で終了となる）。一般の参加者を含めた規模はいずれも数百人ほどである。

こうした式典の具体的な事例として、2008年のキョルフエズ市で行われた式典について少し詳しく見てみよう。

キョルフエズ市の式典は、住宅街のなかにある地震記念公園で開催される。この公園名は公園の中に市役所によって作られたモニュメントに由来する（写真4）。この日の主催はやはり市役所で



写真4 地震記念塔（地震記念公園）

あったが、実質的な運営は MAG (Mahalle Afet Gönüllüleri, 町内防災ボランティア⁽¹⁵⁾) というキョルフエズに支部のある防災 NGO であり、事前から熱心に準備をしていたため、かなり大がかりなものであった。

式典は8月16日の夕方に始まったが、それに先立ち、学者を招いてのパネル・ディスカッションが、少し離れたところにある市の施設で行われた。そのあと人びとはこの公園に移動した。会場付近には「(われわれは)8月17日を忘れていない (unutmadık) ! 忘れさせない (unutturmayacağız) !」と書かれた横断幕が張られ、会場はたくさんのトルコ国旗によって飾られていた。ここには、あの「忘れない」が繰り返されていることとともに、地震の日付である「8月17日」が記憶を指す名前として機能していることも見ることができる [cf. 木村 2006a]。

この式典において最初に行われたのは、MAG のメンバーたちによる行進であった。彼らは総勢30人ほどで、オレンジ色の救助隊のユニホームを着て、「私の声が聞こえる人はいますか? MAG はここにいるぞ! 声が聞こえたら返事しろ! できなければ近くにある硬いものを叩け!」と大きな声で叫びながら、夕闇のなか、赤々と燃える松明を掲げて町を練り歩き、公園に向かった。そして彼らの到着とともに、式典が開始された。

ちなみに、この「私の声が聞こえる人がいますか? (Sesimi duyan var mı?) …」という掛け声、特にその後半部分は、初めて聞くと奇異に思えるかもしれない。これは実は地震直後におこなわれた救助活動において使われた、要救助者を探すときの掛け声なのであり、瓦礫の下に閉じ込められた人びとに対し、救助隊は声が聞こえたら返事をしろ、返事ができない状態なら、どうにかして外に聞こえるように音を出せ、と叫んだのである。その後、この言葉は比喩的に、人々に防災活動に参加することを呼びかけるメッセージとなった。

つまり、言ってみればこの救助隊による行進は、1999年8月17日において行われたこと(救助)を反復しつつ、当時は存在しなかった、効果的に、組織立って救助を行う人びとの姿を示そうとしているのである。それが8月16日の夜、つまり「8月17日」の来る直前だということは、きわめて示唆的である。会場に向かう道々、彼らは住民から声援をかけられたり、拍手を受けたりした。

さて会場には数百人規模の近隣住民が訪れ、ちょっとしたお祭り騒ぎになっていた。会場ではちょっとした食事も配布されていたし、市や NGO 団体が活動紹介をするスタンドなどもあったりしたので、大人たちに交じって子供連れも少なくなく、その辺りではしゃぎまわったり、配られるパンフレットを片端から集めようとするなど、厳粛な雰囲気というよりは、行楽地を訪れる人々の姿に近かった。

行進をした人々が会場に到着して場が多少落ち着くと、マイクを持った司会が記念塔の前に現われ、まず地震の犠牲者のための黙祷が行われた。次いで国歌が斉唱されると、今度はイマームが演壇に招かれ、クルアーンの朗誦を行った。世俗主義国家トルコにおいて公的な行事においてイマームが出てくるのを目にすることはあまりないため、初めて見た時は驚いたが、これは地震の死者の追悼のためのものであるということで、他の人びとは誰も奇異には思わないようだった。

つづいて講演になった。この時は、予定されていた講演者は5人だったが、それを越えて10人ほどがかわるがわるしゃべった。話をしたのは、学者(前カンディリ観測所兼地震研究所所長やイスタンブール大学の地震学者)、NGO 関係者 (DEPDER という被災者相互扶助 NGO の長や MAG

の長など地震にかかわる団体、およびローカルに活動を展開する NGO のうちのいくつかの有力な団体)、そして行政(キョルフエズ市長)である。いずれも冒頭で式典を運営する人びとと来場した住民に感謝したうえで、1999年から今までに防災に関してなされたことが不十分であることを訴え、対応をとともに進めていくべきであることを主張した。その間、演壇の上に設置された大きなスクリーンでは、地震の直後の光景が延々と映し出されていた。演壇の前には百席を越す大量のプラスチック椅子が並べられており、多くの人々はそこに座ってじっと耳を傾けていたが、立って歩きまわるものも少なくなく、騒然とした状態で式が続いた。

11時すぎ、講演を含めて予定されていた項目が終了したことで、式典はいったん終了し、来場者たちはぞろぞろと家に帰って行った。そのあと MAG のメンバーは会場を片付け、最後に3時を目指して有志とともに船で海に乗り出し、予定通り湾の対岸にあるギョルジュク市からの船と出会い、そこで花輪を海に投げ入れ、終了した。

こうした式典は、「資源」として捉えたとき、どのようなことが言えるだろうか。拙論[木村2006a]では、ギョルジュク市での2005年の式典をもとに、以下のように書いた。

「8月17日」についての滑らかな語り、あるいはメッセージが行政(あるいは行政によって委託された学者やボランティア)によって与えられ、それを住民が受容する、というのがこの一連の式典の仕組みであった。ここでは、トラウマ的な記憶を抱え孤立していきがちな住民に対し、集団(市)の側から住民に対して、「われわれ」の一人であるようにと、言葉が投げかけられているようであった。

この式典における、公的な「8月17日」の記憶のあり方を受け入れるよう促す行政からの呼びかけを通じて形成される「われわれ」の姿は、地震の経験に立ち向かい、それを乗り越え、すでにそれについて滑らかに語ることでできるギョルジュク市民、というものである。これは阪神・淡路大震災の記憶を論じる今井[2001:2005]が、死者たちの記憶の共有を通じて形成される「わたしたち」に関して、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論を援用しつつ行う、「非対面的な関係」と「対面的な関係」という区別においては前者に近い。ここでは災害の経験は個別的な意味合いを薄め、むしろ秩序のための象徴的な意味を帯びるのである。

この図式は、上で見たキョルフエズ市の式典でも当てはまる。演壇から、聴衆である市民に向かって、記憶を思い出し、地震防災に取り組むよう、呼びかける。ここでは様々な要素が式典を構成している。記念公園のモニュメント、オレンジの救助服、語り手の言葉やスクリーンに映し出される写真、はたらく国旗。呼びかけるのは、行政や研究者など、すでに防災に関わる人々である。言うなれば、この式典、あるいはそこで強調された「私の声が聞こえる人はいますか?」という声は、「われわれ」の一員になるように呼びかけているのである。

こうした呼びかけにおいて印象的だったのは、2007年のイズミット市の式典において演壇に立った小学生の女の子である。この式典では数人の被災者が演壇に立ち、自らの体験を語ったのだが、地震当時1歳だったというこの女の子は、地震時に家がどのように壊れたかを説明し、倒壊した建物

の下で祖母が亡くなったことについて語ったのである。普通に考えて、地震の時に1歳だった子供が、当時の様子を克明に語るができるわけではなく、彼女が語ったのは、おそらく親や周囲の大人から繰り返し聞かされた災害の様子だと考えられる。⁽¹⁷⁾つまりこの語りが示しているのは、災害を「知らない」はずの個人が、災害の記憶を共有する「われわれ」となり、さらにそれを他の人びとに向けて語りかけている、ということなのである。記憶はこうして、「われわれ」をつくりあげるための「資源」として、利用されているのである。

もちろん、こうした「呼びかけ」に、すべての人が反応するわけではない[木村 2006a]。キョルフエズの式典に集まった人々も口々におしゃべりをしており、演壇からの語りに全員が熱心に耳を傾けていた、とは言い難い。このことからわかるように、この「資源」は、必ずしも十分な効果をあげないかもしれない。しかし、少なくともこうした式典をひとつの契機として、地震の記憶が想起され、被災者たちのあいだで、あるいは被災しなかったものたちに向けて語られるだろうということは明らかである。言ってみれば、記憶という「われわれ」をつくりだすための「資源」は、「資源化」されていないだけで、その「本源」は利用者となるべき人びとのきわめて近いところに潜在しているのである。

⑤……………資源の零度?

ここでふたたび、記念碑の「忘れない」のことを思い出してみよう。それは誰が何を忘れないよう訴えているのか、地震文化博物館と記念式典の検討によって、かなり明らかになった。

しかし、博物館には展示物があり、記念式典には語りがあるのに対し、記念碑には共有すべきものがなにも備わっていない。もし記念碑が、博物館の示唆するような地震に強い「われわれ」をつくりだすための「資源」であるとするれば、それはどのようにして「われわれ」をつくりだすのか。こう考えたとき、あの「忘れない」が何なのかがはっきりする。記念碑がさし示すのは、「本源」としての「われわれ」なのである。より明確に言えば、記念碑が訴えるのは、自ら「資源」化せよ、という命令なのである。防災をする「われわれ」——第1章の言葉でいえば共助する住民——をつくる、というのは集団をつくりだすだけではない。個々人を、それにふさわしい個々人につくりかえることなのである。⁽¹⁸⁾

こうした個々人にとっては、様々なものが「資源」となりうる。そうした目で見れば、町は「資源」——地震の痕跡——にあふれている。新聞記事でもいい、集合墓地の墓石に書かれた嘆きの言葉でもいい、倒壊家屋が撤去されたまま、未だところどころに空き地の残る町の風景でもいい。それは地震そのものではなく、地震の痕跡である。様々なものを「資源」化し、それをもとに、より防災意識の高い(duyarlı)個人になるだろう。こうなったとき、「資源」は必要でなくなる。モノ化した「資源」はたんなる契機となり、人びとはヘーゲル的な円環を描きながら、防災に取り組む「われわれ」となるのである。

しかしもちろん、こうした図式は理想的なものにすぎない。実際にはこうした個人は、筆者の見限りまだまだ少数派であるし、「われわれ」から身を逸らそうとする動きもある[木村 2006a]。つまり「資源」としての記憶は、こうした円環を描くのに十分なほど、活用されているとは言えな

いのである。これはなぜだろうか。

この問いに対して筆者には今のところ仮説的な指摘をすることしかできないが、ひとつ言えるとするれば、阪神・淡路大震災の時にも示唆されていた、記憶する「われわれ」と、防災に取り組む「われわれ」とが、無前提にイコールで結びえない、ということである [cf. 蘇理 2002]。宮崎 [2001] に倣って哲学者 E・ブロッホの言葉を借りれば、前者は過去志向的な視点であるのに対し、後者は未来志向的な視点であり、両者は相異なる。前者を後者に反転させるのではなく、両者を結びつけるには、つまり過去の経験を生かし、未来に立ち向かう「われわれ」というものになるためには、先に時間的に持続する「われわれ」が想定され、そのうえで過去から未来への行程がひとつの物語として語られなければならない。そのためには、たとえば阪神・淡路大震災の後の「がんばろう KOBE」という掛け声のように、ある土地、空間をその同一性の持続の基体とすることがありうる。本論文でも、第3章で扱った地震文化博物館において「アダバザル」が焦点化していたことは、こうした試みとして理解できる。しかし、その章でみたように、この「アダバザル」はあくまでも、「資源化」する主体によって仮構されたものにすぎなかったのである。

このトルコにおける「われわれ」の弱さを、この地域の社会的文脈に位置づけて考えると、相互に関わりあう二つの点が指摘できる。ひとつは、トルコでは災害復興は国家あるいは行政、つまり地震文化博物館の文章にあった「責任ある人々」によって担われ、住民が関与する余地があまりない、ということである。より具体的に言えば、災害後は国によって仮設・恒久ともに復興住宅が建設され、家を失った人々はそれをあてがわれたり、あるいは金銭的・物質的な援助を受けたりするのみで、復興都市計画に関して住民が意見を出し、それを実際の計画に反映させられるような仕組みはないし、筆者が行ってきた聞き取りにおいては住民がそのことに対して不満があるようには見えなかった。

もうひとつは、この地域の社会関係が、空間にそれほど縛られていない、ということである。この地域においては、ここ数十年の間に移住してきた人びとがかなりの割合を占めており、出身地による結びつきとしての同郷組合がきわめて多く存在する。被災者の聞き取りにおいても、被災後にすぐに郷里の県に戻ったとか、被災していない地域へ移動して、復興に合わせて再度戻ってきた、という語りが多かった。このことは今述べた、復興に住民がそれほど関与しなかった、という点とも関わりあう。⁽¹⁹⁾

この地域において、土地の上に形成される「われわれ」が空虚なままであることに関しては、以上のような背景が考えられる。そこでは「われわれ」はたんに存在が要請されるだけで、いまだ何も成し遂げていないのである。⁽²⁰⁾

⑥……………おわりに

以上、本論文では「文化資源」をひとつのメタファーと捉え、その枠組みから災害の記憶に関わる事物を見てきた。それによって、以下の二つのことが明らかになった。

まず、本論文の冒頭では、資源という概念の定義から、あるものを「資源」として「利用」するためには、それをを用いて生み出される「何か」と、それを生み出すための主体の存在が要請される

ことを指摘したが、本論文の諸事例を通じた検討からは、あるものを「資源化」する主体と、「利用」する主体の二つを区別して考える必要があることが明らかになった。本論文で検討してきた事例は、この両者の区別は比較的是っきりしており、「資源化」する主体は行政と、「利用する」主体は住民と、緩やかに一致するといえる。ただもちろん、地域住民が自ら過去の災害の記憶の保存や伝達につとめるという場合のように、この両者が一致する、あるいは厳密に区別しづらい場合もありうる。こうした区別が明瞭になるかどうかはおそらく、その地域がどのように災害に対応してきたか（行政主導か、住民主導か、あるいは外部からの支援組織に依存してきたのか、など）という歴史的な経緯によって影響を受けると考えられるということが、トルコの事例からは示唆することができる。しかしいずれにせよ、「資源」としての災害の記憶そのものが、いまだ十分に確立した制度とはいえず、それぞれの現場において、様々なアクターの相互作用のなかで試行錯誤が試みられている、というのが実際のところであるだろう。

もうひとつ、本論文からは災害の記憶に関しては、「利用する主体」と、「資源」の「利用」によって生み出されるもの（本論文では「われわれ」と呼んだ）とが一致することが明らかになったが、このことは、「資源」としての災害の記憶の多くに共通すると言えるだろう。災害に関わる記憶の活用は、災害に配慮する主体を生み出そうとする。災害に配慮する主体は、さらなる災害の記憶の活用（資源化）と、それを通じた災害に配慮する主体の形成に取り組む。つまりここでは、「資源」は「資源」であると同時に、ひとつのサイクルを開始させる契機としても存在するのであり、そのことは結果的に、「資源化」する主体と「利用する」主体の区別を曖昧化することにもなるのである。

ただし、繰り返し述べているように、この企図は必ずしも成功しているとは言えない。その意味でこの「資源」については今のところ、「枯渇」は問題にならないが、逆に、こうした「資源」が持続的に利用されていないのはなぜか、という問いを残す。これに対して本論文では、「利用する主体」にかかわる問題を指摘した。それは、ひとつには歴史的経緯のなかで「利用する主体」となるべき人びとと「資源化する主体」とがある程度分離しているトルコの文脈において、両者の間のコミュニケーションが十分にできていないこと、もうひとつには、必ずしもトルコの文脈に限定される問題ではないが、「利用する主体」であり「利用」によって生み出されるべき主体であるものが十分な内実を伴っていないことがある。

この「生み出されるべき」主体は、単に枠を与えるだけでは成立しえず、人びとの集合的な行為や自発的な連携によって「資源化」する主体と「利用」する主体との距離を縮め、それによってその空虚な中身が埋められなければ、存在しえないのである。それゆえ「資源」としての記憶が持続的であるためには、そうした自発性までを生み出すことがひとつの条件となるだろう。筆者はそうした「資源」としての記憶が人びとの自発性にまで関わるのが好ましいことだとは思わないが、しかしそれは実行可能である。

謝辞

本論文の構想のもとになった2008年度の調査に関しては京都大学グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」から助成を得た。記して感謝の意を表す。

註

(1)——これはグレゴリー・ベイトソン [2000] が言っている「ゆるい思考」に他ならない。彼はある漠然とした概念やメタファーをつかって枠組みをつくる「ゆるい思考」と、その枠組みをより精緻化する「厳密な思考」を交互に行うことで研究が進められると述べている。

(2)——「人と防災未来センター」ウェブサイトより (<http://www.dri.ne.jp>, 2008年11月19日閲覧)。

(3)——原文は *17 Ağustos 1999/ Deprem Şehitleri/ Anısına Yapılmıştır/2007/Unutmayacağız*

(4)——*şehit*, 直訳すると殉教者。

(5)——トルコ語では未来の事象を示すとき、超越形と未来形を使いうるが、後者を選ぶことは、慣習的に、その事態（ここでは「忘れない」ということ）がより確実であること、あるいは語り手がそうなることを強く意識していることを示す。

(6)——この「忘れない」という言葉は、1999年の地震をめぐる、きわめて重要なキーワードになっている。第4章でも見るように、地震の日がめぐってくるたびに、新聞などのマスメディアで、あるいは記念式典のスピーチにおいて、「(われわれは) 忘れない (*unutmayacağız*)」とか「(われわれは) 忘れさせない (*unutturmayacağız*)」とか「(あなたがたは) 忘れないで (*unutmayın*)」という言葉を目にすることになる。このことは、本論文で論じる「持続性」の問題が現地において強く意識されていることを示す。

(7)——そこには日本における「人と防災未来センター」や「北淡町震災記念公園」など、地震にかかわる博物館のことが念頭にあったようである。

(8)——2008年9月、アダバザル中央市役所助役の Yusuf Ertuğrul Erdem 氏に対して行った。

(9)——とはいえ、どのようにその数を算出したかは不明である。平均すると日に200人ほどの入場がなければいけないが、筆者が訪れた(2005年2月と2008年9月)時には決してそれほどの入場者があるようには見えなかった。

(10)——いずれも記憶をさす *anı* と *hatır* という語を語幹にもっている。両者の派生語を見てみると、前者については記念碑 (*anıt*)、記念式典 (*anma töreni*) などがあり、後者は思い出の品 (*hatıra*) などがある。このニュアンスの違いはきわめて繊細なもので、それを説明するのは筆者の力の及ぶところではないが、これらに *la* をつけて動詞化すると、多少意味合いが変わ

る。*Hatırlamak* が思い出すという意味になるのに対し、*anlamak* は理解する、気づくという意味になる。入口に書かれた *anlatmak*, *hatırlatmak* は、この二つの動詞にさらに *t* をつけて使役の形にしたものである。

(11)——上記、来館者用のノートには、死者の近い人々の悲しみの吐露と鎮魂の祈りや、こういう悲劇が繰り返さないように、という祈りの文章などが数多く記されている。

(12)——このほか、「1999年8月17日のマルマラ地震、1999年11月12日のドゥズジェ地震で出た合計500m³の半分、つまり250m³がアダバザル市街地から出たことを知っていますか？」というものもあった。これもやはり、「アダバザル」に焦点を当てたものだといえる。

(13)——筆者はすでに記念式典について記述したことがある [木村 2006a]。次章での記述はそれをふまえて、新たなデータと論点を示すものである。

(14)——たとえばギョルジュク市のもは、第2章でふれた記念碑のある海岸にある広場で行われることが恒例になっている。

(15)——彼らについては拙論 [木村 2006b] を参照のこと。

(16)——この機関については拙論 [木村 2007] を参照のこと。

(17)——実際、彼女の語りは、直接に経験したことを示す過去形 (*-dik*) ではなく、伝聞を示す過去形 (*-miş*) が多用されていた。

(18)——トルコ語のニュアンスをもちいれば、それは意識の高い (*duyarlı*) 個人である。*Duyarlı* の語幹は *duy* であり、これは「聞く (*duymak*)」から来ている。これは「私の声が聞こえる人がいますか」という呼びかけに反応することに通じる。

(19)——これに対し、復興がナショナリズムと重ね合わされたという台湾の事例は対照的である [木村・松多・阪本・松岡 2008]。また被災者に対する聞き取りの詳細はここでは示せないが、別稿で詳しく論じる予定である。

(20)——とはいえ、たとえば第4章で登場した MAG や、記念碑設置の原動力になった GESOTİM などの NGO のように、災害を経験し、行政から多少距離をとりつつも、これからの備える「われわれ」を作ろうというローカルな動きがないわけではない。彼らには地域に根差しつつ、地域を越えていこうという方向性が見られるが、これについては稿を改めて論じたい。

参考文献

- KYM (T. C. Başbakanlık Kriz Yönetim Merkezi) 2000 *Depremler 1999* (1999年の地震). Ankara: T. C. Başbakanlık.
- アルヴァックス, モーリス 1989 『集合的記憶』小関藤一郎訳, 行路社。
- ベイトソン, グレゴリー 2000 「民族の観察から私が進めた思考実験」G. ベイトソン 『精神の生態学』佐藤良明訳, 新思索社, pp.132-149。
- 福島真人 1998 「文化からシステムへ: 人類学的実践についての観察」『社会人類学年報』24: 1-28。
- 今井信雄 2001 「死と近代と記念行為」『社会学評論』51 (4): 412-429。
- 今井信雄 2005 「記憶の場所, 被災地のつながり」関西学院大学 COE 災害復興制度研究会 (編) 『震災復興』, 関西学院大学出版会, pp.153-165。
- 内村仁司 2007 「資源の概念」内堀基光 (編) 『資源人類学 01 資源と人間』弘文堂, pp.349-371。
- 木村周平 2006a 「回帰する『8月17日』: トルコにおける地震の集合的記憶をめぐって」『文化人類学研究』7: 156-170。
- 木村周平 2006b 「暗い未来に抗して: トルコ・イスタンブールにおける地震とコミュニティ」『文化人類学』71 (3): 347-367。
- 木村周平 2007 「地震学・実践・ネットワーク: トルコにおける地震観測の人類学的観察」『文化人類学』72 (1): 540-559。
- 木村周平, 松多信尚, 阪本真由美, 松岡格 2008 「地震の記憶の比較研究: トルコ, 台湾, インドネシア」『日本活断層学会 2008 年度秋季学術大会講演予稿集』 pp.85-86。
- 宮崎広和 2001 「方法としての希望」『社会人類学年報』27: 35-56。
- 佐藤健二 2007 「文化資源学の構想と課題」山下晋司 (編) 『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂, pp.27-60。
- 蘇理剛志 2002 「阪神・淡路大震災と慰霊—『震災モニュメント』以前」『現代民俗誌の地平 3 記憶』(岩本通弥編), 朝倉書店, pp.14-40。
- 内堀基光 (編) 2007 『資源人類学 01 資源と人間』弘文堂。
- 山下晋司 2007 「文化という資源」内堀基光 (編) 『資源人類学 01 資源と人間』弘文堂, pp.47-74。

(京都大学東南アジア研究所, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2009年5月28日受付, 2009年9月25日審査終了)

Memory as a Sustainable Resource? : Disaster Memory of Kocaeli Earthquake, Turkey

KIMURA Shuhei

This paper attempts to examine “sustainable use” of memory of Kocaeli Earthquake, Turkey, through using “cultural resource” as a metaphor.

Natural disaster is one of the central problems for each society. After 1990s, it is insisted that state or local government cannot do all and that local people should fulfill an important role in disaster prevention or mitigation. Recently people engaging in disaster management have focused on disaster memory, which would lead local people’s proper action. Therefore to make past disaster experience or memory sharable and available for the purpose of disaster preparation can be said one of the ways to use local landscape as a “cultural resource”.

On August 17th 1999, at 3:02 in the morning, a great earthquake hit the northwest part of Turkey claiming more than 17,000 lives. This disaster was a great shock to Turkish society physically and economically, as well as psychologically. It changed the awareness of disaster risks and, as a consequence, contributed to the transformation of the disaster management system. I pick up and analyze a monument of the earthquake in Gölcük, a disaster museum in Adapazarı, and annual ceremony in Körfez in detail.

Through case study analysis, I claim that “cultural resource” metaphor need a certain framework; the subject(s) to make it resource, the subject(s) to use it, and the purpose(s) to use it. In disaster memory, the purpose of the resource is to create a community that shares memory of past disaster and do prepare for future disasters. It is therefore the subject(s) to use resource coincide with the purpose of the resource. It indicates the difficultness to treat memory as a resource; memory is a resource and at the same time, a trigger to subjectification of the users. As a conclusion, I point out the dubiousness of the subject(s) that are assumed to use memory as resource and to become subject(s) who concern with disaster preparation in the discourse of disaster management.

Key words: Cultural resource, Sustainable use, Disaster memory, Turkey, Kocaeli Earthquake
